

# キャサリン・マンスフィールドの作品に見る 日常生活と永遠の課題

堀 出 稔

## Everyday Life and Eternal Subjects Suggested in the Works of Katherine Mansfield

Minoru HORIDE

Katherine Mansfield が *The garden Party and Other Stories* を完成させ、Constable から出版されたのは、1922年2月23日、彼女の生涯を閉じる前の年にあたる。1903年に2人の姉達と共にロンドンの Queen's College に学ぶためニュージーランドからイギリスに来て以来、33年が過ぎていた。当時ヨーロッパ世界は政情不安定であり、1914年になって第1次世界大戦となつた。イギリスはヴィクトリア女王が没し、エドワード時代を迎えたが、国内外共に激しい政治情況であった。そのような時代背景もあって、渡英以来の Mansfield の生活も波瀾に満ちていた。生涯の友となる Ida Constance Baker との出会い、音楽家 George Bowden との奔放な結婚と別離、後に正式の結婚の相手となる John Middleton Murry との生活が作家としての執筆活動に安定感を与えていった。だが最も悲しい出来事が生じた。弟 Leslie がイギリス軍に志願し、Ploegstreet Wood で爆弾の破裂によって不慮の死を遂げたことである。Mansfield 自身が憧れてイギリスでの作家生活を送ることになったものの、このような様々な出来事に遭遇しなければならなかった。*The Garden Party and Other Stories* は、波瀾の生涯を34才で閉じようとする彼女の晩年の作である。作品群にはその生涯の光と影の微妙な錯綜が読者に伝わってくる。この小論においては、*The Garden Party and Other Stories* の文体、小説の構成、短編集全体を通じての作者の視点から、Mansfield の晩年に到達した人生観を考えてみたい。

*The Garden Party and Other Stories* は13編の short stories から成り立っている。おおまかに分類してみると、故国ニュージーランドの思い出、若い女性の人生への出発、夫婦などをテーマにした作品群がある。さらに *Life of Maparker*, *The lady Maid* などに見られる作者にとって関心のある人物像の人生諸相をあつかう作品群がある。13編の作品のほぼ半数が1921年に書かれている。この年には彼女は友人 Ida Baker と共に結核療養のため、スイスに赴いた。後に Sierre に移り、Murry もそこを訪れ、生活を共にしながら病気療養を続けた。特に短編集の一つ *The Garden Party* は、33才の誕生日の夜完成されたと言われている。死期は近づいていたものの、それとは対象的に創作意欲が燃え、作家としての充実感がどの作品にもあふれていた。文体はきわめて簡潔で澄みきった感性が伺われる。言葉をできる限り選び、省略し、行間に余韻を漂わせ、リズムカルである。

The telephone. 'Yes, yes ; oh yes. Kitty?'

Good morning, dear. Come to lunch?

Delighted of course...'

*The Garden Party* の女主人公 Laura が友人 kitty に電話する場面である。The Telephone. といった手法は、他の短編にも数多く見られる。また擬聲音を豊富に使用することにより、読者の感覚にその情景を生き生きと伝えている。

Mia-oo-oo-o-o! The second whistle blared<sup>2)</sup> just above their heads, and a voice like a cry shouted, 'Any more for the gangway?'

*The Voyage*において Fenella と彼女の祖母が乗船する時、船が鳴らす汽笛の音がこのように聞こえるのである。Splish-Splash! Splish-Splash!<sup>3)</sup>といった水の音、chock-chock<sup>4)</sup>といった木槌の音、Roo-coo-coo-coo<sup>5)</sup>と鳴くハトの声などによって物語に活気を与えていている。短編全体を通して会話文が頻繁に登場する。読者はその話し手達の言葉を追っていくうちに、彼等の心理状況を知ることができる。

'I can't open,' she nearly wailed.<sup>6)</sup>

'No, don't, Jug,' whispered Constantia earnestly.

'It's much better not to. Don't let's open anything.'

At any rate, not for a long time.'

'But—but it seems so weak,' said Josephine breaking down.

'But why not be weak for once, Jug?' argued Constantia,  
whispering quite fiercely. 'If it is weak.'

この会話文は、*The Daughters of the Late Colonel* の一文である。故 Pinner 大佐の死後、取り残された娘達 Constantia と Josephine の2人が故人の身のまわりの品を整理しようとする。戸棚を開けようとするが、まだ心の動揺が続いている、不定な精神状態となる。また会話文の中には間投詞、言葉の反復、感嘆符などが頻出している。

1) 'good heavens—why! I—I don't mind it a bit.'<sup>7)</sup>

I—I like waiting.

2) God forbid, my darling, that I should be a drag on your happiness.<sup>8)</sup>

'Oh! oh! oh!'

'Sh! sh! sh!'

1) は *The Young Girl* の一文である。Hennie が男友達に車の中で母親を待つように言われた言葉。2) は *Marriage à la Mode* で Isabel をひやかす言葉。このように Mansfield は作品の至るところで情景を彷彿とさせる技法を用いている。それと共に描出話法を駆使し、登場人物の内面を良く伝えている。

小説を全体的構成として見た場合、優れた短編の一つは *The Garden Party* であろう。この作品の構成は、朝の園遊会の準備から午後終了する過程が設定されている。だがその同じ日に、Scot という名の隣りに住む荷物運搬人が不慮の死を遂げる。楽しみの只中にいる Sheridan 家の人々の心と悲しみに打ちのめされた Scot の妻の心との間には、越えがたい隔りがある。心の純粋な Laura と Sheridan 夫人の意見が対立する。

'People like that don't expect sacrifices from us.'<sup>9)</sup>

And it's not very sympathetic to spoil everybody's  
enjoyment as you're doing now!...'

Laura は納得できない。彼女は隣人が悲しむ時楽しむわけにはいかないという博愛的立場に立とうとする。だが結局のところ現実を数多く体験してきた Sheridan 夫人の意見に従い、園遊会は開かれることになる。園遊会の終りに Sheridan 夫人の指示で Scot 家を訪れることにな

った Laura は、やすらかな表情で死の床に就いている荷物運搬人を見て、Forgive my hat<sup>10)</sup> と言い残して去る。この言葉は、Sheridan 夫人の意見に服したが、心の奥底に隣人愛の精神が流れていることを物語っている。The Garden Party という短編には、若い娘を通して人間の日常性の中に人生の根本命題を提出するという見事な小説構成が伺われる。

では The Garden Party and Other Stories における作者の視点はどこにあっただろうか。分析結果は、1) 生きとし生けるものへの限りない愛、2) 生きるということの様々な諸相、3) 作者の内面に結晶した望郷の想い。そして 1), 2), 3) は互いに切り離すことができないようだ。1) についてはその対象となるのは、自然、動物、人間であろう。

On the table a white cat, that had been<sup>11)</sup>  
folded up like a camel, rose, stretched itself,  
yawned, and then sprang on to the tips of its toes.

The Voyage の一場面である。母が世を去り、悲しみのうちに Finella は祖母に連れられ、船に乗り、ようやく祖父の待つ家に着く。ふと見ると一匹の猫が眠りから覚めたところだった。そのやすらかな姿を見たとたん安堵し、微笑がこぼれる。このような動物の愛らしい描写は、At the Bay においても、羊の群、犬、猫のユーモアに満ちた様子が描かれている。Her First Ball では、Leila の悲しみを癒すものとして家で owls の声を聞くことと語られる。生きとし生けるものではないが、The Voyage に登場する swan の形をした傘の柄は、Finella と同様に愛らしい。Miss Brill においては、毛皮の襟巻を次のように表現している。

'What has been happening to me?' said the sad little eyes.<sup>12)</sup>

Oh, how sweet it snap at her again from the red down!...'

明らかに作者は襟巻の動物に感情移入しているように思われる。Miss Brill の悲しみがそのまま襟巻の動物にも移り、悲しみ涙を流しているように伝わってくる。

自然の風景や植物の描写はどうであろうか。The Garden Party and Other Stories の中には、作者の故国ニュージーランドの自然や風景が数多く登場する。特に避暑のため所有していた Days Bay は、At the Bay の中であります所なく描かれている。

Very early morning. The sun was not yet risen,<sup>13)</sup>  
and the whole of Crescent Bay was hidden under a white sea-mist.

At the Bay のこの有名な書き出しから避暑地 Day's Bay の自然が語られていく。時折り見かける toi-toi といったニュージーランド独特の草花の名前が異国的雰囲気を伝えている。木の表現には次のような文もある。

They were like trees you imagined growing on a desert<sup>14)</sup>  
island, proud, solitary, lifting their leaves and fruits to  
the sun in a kind of silent splendour.

この karaka という木の表現では、作者はまるでイメージの世界の木の姿を追っているようである。イギリスにあって、弟 Leslie と故郷について語り合ったという作者にとって、心の中にあまりにもなつかしく故郷の姿が結晶していた故に、イメージの木のよう書かれたのであろうか。

The Garden Party and Other Stories におけるもう一つの視点、生きるということの様々な諸相について考えてみる。Mansfield の短編集を初めて読んだ時、日常生活の模様を描いたすばらしい水彩画といった印象を受ける。しかし読み返してみると、どの作品にも人間存在の不条理な側面が浮び上る。The Young Girl には次のような言葉がある。

'I like it. I love waiting! Really-really I do!<sup>15)</sup>

I'm always waiting—in all kinds of places...'

Raddick 夫人の娘の言葉である。一見母親を待つというだけのように見えるが、様々な場所で待つということを拡大解釈するば、人生において待つということの意味が問われる。また *Her First Ball* の女主人公の言葉。

Was this first ball only the beginning of her last ball after all?<sup>16)</sup>

この 2 つの例は、限られた人間存在ということに深く関りあってくるようだ。そこには Fair-Field 夫人と Keizia との人間の生死についての対話と共通点がある。もう一つは、*Life of Maparker* の自分ではどうすることもできないおかれ立場に気付き、途方にくれている姿にも関りが出てくるのではないだろうか。

今まで Katherine Mansfield の晩年の作 *The Garden Party and Other Stories* について分析してきた。文体や手法については、以前の短編集とそれほどの相違はないが、軽やかで水彩画の趣きの中に深く人間の生と死という問題を含んでいる。作者 Katherine Mansfield は、この世での時をおしみつつ、病気と戦いながら生と死という避けがたい人間存在について考え尽していたのではないだろうか。

### 注

1) *The Gader Party and Other Stories*, 69

2) *Ibid.*, 173

3) *Ibid.*, 13

4) *Ibid.*, 68

5) *Ibid.*, 127

6) *Ibid.*, 102

7) *Ibid.*, 141

8) *Ibid.*, 168

9) *Ibid.*, 543

10) *Ibid.*, 87

11) *Ibid.*, 183

12) *Ibid.*, 184

13) *Ibid.*, 9

14) *Ibid.*, 68

15) *Ibid.*, 142

16) *Ibid.*, 201

### 文 献

1) Katherine Mansfield : *The Garden Party and Other Stories*, Penguin Books (1964)

2) John Middleton Murry : *The Scrapbook of Katherine Mansfield*, Howard Fertig (1974)

3) Antony Alphers : *The Life of Katherine Mansfield*, The Viking Press (1980)